

地域を守る消防団！

災害時に消火・救助活動を担う消防団員。その担い手が全国的に不足しています。杉並区でも、同様に団員数の減少が続いていましたが、消防団のメンバーによる駅頭や成人式での地道な募集活動などを通じて、団員数が回復。地域を一番知っている消防団の存在が、地域を守ります。

消防団は、江戸時代の町火消から、消防組、警防団、そして昭和22年に現在の名称となりました。どの時代でも、いざという時にいち早く火事場に駆け付け、町の安全と安心に欠くことのできない存在でした。最近でも、東日本大震災での献身的な活動などが、広く報道されました。消防団員は、非常勤の特別職地方公務員の身分で、普段は自営業などの仕事をし、災害があれば出勤することになっています。23区内には、消防署の管轄ごとに配置され、58の消防団が活動しています。

消防団員の役割は、消火・救助活動のほかにも、水防活動、そして防火の啓発活動も担っています。地域住民で構成されているため、地域にも詳しく、地域への愛着も深いことから、消火や救援活動時には、大きな力を発揮してきました。しかし、大きな役割を担う消防団も、平成元年には全国で100万人が活動していましたが、26年度は86万4千人あまりとなり、団員数の減少傾向が続いています。杉並区内でも、杉並消防団（定員400名）、荻窪消防団（定員350名）とも、減少傾向となっていて定員を満たすことはできていません。この団員不足は、商店などの自営業が減り会社勤めが多くなったことや、地縁関係が薄れ、こういった地域貢献活動への関心が低くなったことが影響しています。



災害は何時、どこで起きるかわかりません。東京でも首都直下地震の発生が懸念されています。そこで、杉並・荻窪の両消防団は団員を増やすため、駅前や成人式会場での募集チラシの配布や消防団協力事業所の協力を得て、消防団のPRを展開しました。その結果、これまでは毎年14～15名ほどの入団者だったものが、平成25年4月から1年の間に杉並消防団では20人、荻窪消防団では30人の新入団員を迎え入れることができました。新メンバーは、20代・30代の若い世代が大半です。特に、30名の新団員を確保した荻窪消防団では、6月24日に総務大臣感謝状を受領しました。

また、区内では教育の場でも地域と防災が大きく取り上げられており、幼少期からの防災教育として地域への愛着や防災への関心と行動力を身につける教育が行われています。それが、区内の中学生で組織する中学生レスキュー隊で、平成17年に発足しました。発足以来、1000人を超える経験者を産み出し、将来の消防団活動の担い手となることも期待されています。